

知事対談

# 村岡恵理 × 横内正明

Eri Muraoka

作家

『アンのゆりかご 村岡花子の生涯』作者

Shomei Yokouchi

山梨県知事

## 花子青春の地、山梨に寄せて

『赤毛のアン』翻訳などを通して、多くの人に夢と希望を与えた村岡花子。その偉業に故郷・山梨はどのように関わっているのか。花子のお孫さんである作家・村岡恵理さんに横内知事との対談を通して、山梨への思い、本の持つ力などについて、語っていただきました。





## 花子に進むべき道を示した 甲府での教師生活

**知事** 恵理さんの著作を基にしたNHK連続テレビ小説「花子とアン」が、非常に好評です。富士山やブドウ畑の風景、ワイン、ほうとう、それに甲州弁など、山梨の魅力が散りばめられているのも、とてもありがたいと思えますね。作者である恵理さんのところにも、いろいろな声が寄せられているんじゃないですか？

**村岡** 放送が始まってから、本当にいろいろな方から生前の祖母の思い出などを伺う機会が増え、祖母はまだ多くの方の中で生きていらっしゃるんだと感動しました。そしてあらためて、すごくたくさんの種をまいた人だったんだと感じています。

**知事** 今日の会場は、かつておばあさまが教師をされていた山梨英和中学校・高等学校ですが、いかがですか？ 建て替えられてはいますが、このチャペルには当時の面影も残っているそうですよ。



山梨英和中学校・高等学校グリーンバンクチャペルにて

**村岡** 何となく、祖母の気配を感じるような気がします。ちょうど100年前、20歳で赴任した祖母は、妹のような生徒たちにせがまれて物語を語り聞かせる中で、彼女たちが心から物語を欲しているにもかかわらず、それにふさわしい文学がないことに気が付きます。これが、その後の人生の指針になりました。

**知事** 『赤毛のアン』に、「曲り角をまがったさきになにがあるのかは、わからないの。でも、きつといちばんよいものにちがいないと思うの」という有名な言葉がありますが、東京で文学者の道を歩み始めたおばあさまにとって、甲府での教師生活はまさに曲がり角の先。そしてそこは、夢につながる道だったのです。恵理さんも、おばあさまの翻訳家としての礎は、甲府での教師時代に築かれたとお考えなのですか？

**村岡** はい。祖母はその頃を「青春」と呼んでいます。実際に、いろいろな葛藤、恋や将来の悩みも抱えていて、そういう甘さも苦さも酸っぱさも入り混じった濃密な青春時代だったと思うんです。そしてまた、ここ山梨の豊かな自然環境も、祖母の創作意欲を刺激しました。佐佐木信綱門下の歌人でもあった祖母は、甲府時代に、周囲の自然に自分の心象を重ね合わせ



村岡花子が翻訳して、日本に初めて紹介した『赤毛のアン』の初版本（1952年5月 三笠書房）

た歌を数多く詠んでいるのです。短歌で培った言葉としての日本語の感覚が、東洋英和で磨いた英語力とともに、祖母の翻訳家としての仕事の大きな礎になったと考えています。

## 『赤毛のアン』の世界に 重ね合わせた 山梨の自然や文化

**知事** 『赤毛のアン』を翻訳される際にも、本の中に描かれている風景がおばあさまの記憶の中の山梨と重ねることがあったのでしょうか？

**村岡** 『赤毛のアン』の舞台はカナダのプリンス・エドワード島ですが、祖母は訪ねたことがあります。しかも、翻訳を進めたのは戦争中。そうしたことを考え合わせると、多分モンゴメリの文章から、子ども時代、青春時代を過ごした甲府の美しい自然の風景を思い浮かべていたのではないかと思います。実際、山梨で撮影された「花子とアン」の場面の中に、プリンス・エドワード島



## 知事対談

# 村岡恵理 × 横内正明

Eri Muraoka

作家

『アンのゆりかご 村岡花子の生涯』作者

Shomei Yokouchi

山梨県知事



と本当によく似た風景があつて、私もドキッとしました。

**知事** 当時の山梨は、今以上に自然が豊かで美しかったでしょうし、また甲府も、この地に住んでいた太宰治が「きれいに文化の、しみとおつているまち」と評した通り、文化的水準の高低、非常に静かな、落ち着いた地方都市でしたからね。

**村岡** 文化的レベルの高さは私も感じます。だからこそ、明治維新後、宣教師がこの地に布教しようと考えたのですね。知識人もいて、そうした土壌があつたということだと思います。それに、山梨県立文学館のように設備の整った文学館は東京でも珍しいですね。山梨にゆかりのある文学者が

多いことにも驚かされます。

**知事** 私は少年時代、『十五少年漂流記』や『ガリヴァー旅行記』なんかを夢中になって読みましたが、女の子はみんな『赤毛のアン』でした。戦後の民主化政策の中にあつて、自分の夢に真つすぐに進んで行くアンの生き方は当時の女の子の共感を呼び、目標にもなつたのでしょう。そういう意味で、日本の文学の歴史において大事な本だと思えますね。

「ぬくもり」や「思い」までも伝える本。

メッセージを添えれば特別な贈り物に

**村岡** そういえば、甲府の駅前にあるすてきな建物。あれは県立図書館だそうですね。制服を着た学生たちが楽しそうに出入りする姿を拝見して、とてもうれしくなりました。

**知事** 2012年11月のオープン以来、年間来館者数は全国2番目を記録しています。図書館主催の講演会なども開催しているのですが、今年からは、スペインのサン・ジョルディの日に做つて「大事な人に思いを込めて本を贈る」習慣を広めようという活動も阿刀田館長の発案で始めました。

**村岡** 祖母も、よく家族に本を贈ってくれました。わが家の本棚には、「愛

するみどりへ」「美枝ちゃんへ、おばあちゃんより」など、祖母のメッセージが書かれた本がたくさんあります。やっぱり「愛する誰々へ」なんて書かれると、その本は本当に特別な本になりますよね。そして、その人が亡くなつた後も、その本を通して贈つた人の人柄や温かさのようなものまでが伝わってくる。本つて、そういう力のある素晴らしいものだと思います。

**知事** 恵理さんは、おばあさまからどんな本を贈られたのですか？

**村岡** それが、残念ながら私は本を贈つてもらっていないんです。私が生後11カ月のときに亡くなつてしまったので。それで、「冊がいいから」恵理ちゃんへ」という本が欲しかったなあと、ずっと



山梨英和中・高の三井校長から、生徒が制作したプリンス・エドワード島のジオラマの説明を受け、力作に感心する村岡さん



● 著作の紹介  
『アンのおりかご』  
村岡花子の生涯



村岡花子の波乱万丈の生涯と、『赤毛のアン』の誕生秘話を描いた、心温まる評伝。NHK連続テレビ小説「花子とアン」の原案。マガジンハウス、新潮文庫から刊行。

思っていました。ただ、幸せなことに、祖母の最後のエッセーには、私のことも書かれています。祖母の人生の最後に確かに私が居たんだと思えることが救いというか支えになっています。

**知事** そのエッセーを読ませてもらったのですが、実に平明な言葉でありながら、そこはかとなく赤ん坊への愛情が感じられて、とても良い文章だと思いました。自分の思ったことを素直に書いておられるようですが、おばあさまは、翻訳だけでなく、ああいった随筆も残されている。さらに歌人でもあり、ラジオのパーソナリティーもされていたということ、実にマルチな、精力的な方だったんですね。

## 村岡 恵理さん

作家。1967年、村岡花子の娘（血縁上は姪に当たる）みどりの次女として東京に生まれる。東洋英和女学院高等部、成城大学文学部卒業。祖母・村岡花子の書斎を「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」として保存し、著作物や蔵書、資料を、翻訳家の姉・村岡美枝と共に研究している。また、『赤毛のアン』の著者・L.M.モンゴメリの子孫や、プリンス・エドワード島州政府と交流を続け、日本とカナダの友好関係促進にも努めている。近著に、『花子とアンへの道一本が好き、仕事が好き、ひとが好き』（新潮社）など



**村岡** 祖母は、とても出会いに恵まれた人だったと思いますね。師に恵まれ、友に恵まれ、作品に恵まれた。そして、それを引き寄せる力があつた。

**知事** 恵理さん、そしてお姉さまの美枝さんも、文筆や翻訳の仕事だけでなく、カナダとの交流や東日本大震

災で被災した子どもたちを救う基金の呼び掛けなど、実に幅広く精力的に活動されておられる。こうやってお話ししても、前向きで明るくて、きつとおばあさまの血が受け継がれているんじゃないかね。

## 来春オープン の「山梨近代人物館」でも 花子の業績や 人となりを紹介

**知事** 子どもたちに、自分の郷里に素晴らしい先輩方がいたことを知ってもらい、理想と目標を持って、人生の最後まで前向きに生きてほしいと思ひ、来春、「山梨近代人物館」をオープンすることになりました。明治以降、いろいろな分野で日本の礎になつた山梨出身の50人を紹介するのですが、村岡花子さんもその一人として紹介させていただきます。

**村岡** わあ、うれしい！ぜひ協力させていただきます。甲府は祖母の生まれた地ですし、母方のルーツでもあり、私たちがとつても特別な場所。今のお話もそうなのですが、今回のドラマをきっかけに新しいご縁がこうしてつながっていくことを、とても幸せに思います。

**知事** 県としても、このご縁を大切にさせていただきたいと思っています。今日はありがとうございました。